ティータイムまであった「死の行進」

「死の行進」を根底からくつがえす証拠写真発見！　しかも、それらは米占領軍が目かくしのため〝焚書処分〟した中から見つかったのだ――これぞ天網恢々というべきか。

溝口郁夫
近現代史研究家

執拗に続く宣伝

これまで主に歴史的問題として扱われてきた「バターン死の行進」の論争に、政治性が加わり対日批判のプロパガンダはより活発化しつつある。平成二十二年九月、岡田外相（当時）がバターン死の行進で初めて公式謝罪したことをマスコミが報じた。

「第二次世界大戦中に日本軍がフィリピン・ルソン島で米軍などの捕虜約七万人を約百キロ歩かせ、多くの死者を出したとされる『バターン死の行進』で生き残った元米兵捕虜らと外務省で面会し、外相として初めて公式に謝罪した」（「読売新聞」九月十三日）。

これを受け、平成二十二年九月と今年の十月、米軍元捕虜とその家族が日本に招待されている。昨年の訪日団の代表だったレスター・テニー博士はバターン半島での戦闘の経験者であった。

テニー氏の著書『バターン―遠い道のりのさきに』を翻訳したのは、WS（バイリンガル・ウェッブサイト）東京代表の女性であり、WSの代表を務めているのは徳留絹枝氏である。徳留氏は、『ザ・レイプ・オブ・ナンキン』を著したアイリス・チャンに生前インタビューし、それを朝日新聞社の論壇誌『論座』（平成十年十月号）

に「なぜ私は「レイプ・オブ・ナンキンをかいたのか」を寄稿している。WSの役員名にテニー氏、支援者・アドバイザー欄に日本の民主党の某政治家の名もあり、いろいろと陰でつながっていることがうかがえる。

ところで、本年六月発行された米国人のミカエル・ノーマンほか著『バターン死の行進』(河出書房新社)にたいする書評が、「残虐と悲劇克明に」と題し掲載されている(『読売新聞』平成二十三年六月二十七日)。

「……一九四二年一月に本間雅晴中将の率いる第十四軍は、マッカーサーの米軍をバターン半島へ追い込み、四月に降伏した七万六〇〇〇人の敵兵を炎天下一〇〇キロも歩かせて相当数を死なせたのだ。(中略)ほとんど厳しい軍事訓練を受けなかった米軍部隊や指揮官、マッカーサーの無能ぶりに厳しくメスを入れる一方、行進の途中無断で休んだといっては小銃で米兵を殴りつけ頭蓋骨を打ち砕く日本兵の姿などを克明に描いた本である。……」。

「頭蓋骨」云々については広く知られた話がある。大西洋初横断飛行や息子の誘拐・殺害事件で有名なチャールズ・リンドバーグ(日米開戦後、軍の技術顧問として従軍)は、日記に次のように記録している。

「金歯、軍刀はもとより、大腿骨を持ち帰りそれでペン・ホルダーとかペーパーナイフを造る、耳や鼻を切り取り面白半分に見せびらかすか乾燥させて持ちかえる、中には頭蓋骨まで持ちかえる者もいる。」(『正論』平成十二年五月号「リンドバーグの衝撃証言」)

「……どこかで見たような感じ、そう南太平洋だ。爆撃後の穴に日本兵の遺体が腐りかけ、その上から残飯が投げ捨てられ、待機室やテントにまだ生新しい日本兵の頭蓋骨が飾り付けられているのを見たときだ。」(同前)

米兵は頭蓋骨を「飾り付け」にするかもしれないが、米兵の頭蓋骨を打ち砕く行為は日本兵にとっては何の役にも立たない。大柄な米兵を小銃で簡単になぐり殺すことなどはほぼ不可能であり。書評の一部を読んだだけでも、『バターン死の行進』の内容がいい加減なものであると知れる。

「死の行進」の実相

本間中将率いる日本軍の攻撃により、米軍はバターン半島のマリベレス周辺で降伏。日本軍はそれらの捕虜を一度東海岸のバランガへ集めた。その道のりは四十キロぐらいである。そしてバランガから、目的地である

バターン「死の行進」略図
昭和史研究所作製

サン・フェルナンド駅までは六十キロぐらいあり、合わせて約百キロの距離を数日かけて歩いた(右図参照)。

前述したWSの「用語」の説明欄では、「バターン死の行進」について次のように記されている。

〈バターン半島の南端から、捕獲した推定七〇、〇〇〇人のアメリカ及びフィリピンの捕虜を北へ六〇マイルの地点にあるサン・フェルナンドの列車の駅まで、強制的に歩かせた行進を指すことば。

一九四二年四月九日に降伏ののち、マラリヤと厳しく減らされた食糧割り当てとで、すでに弱っていた推定一、二〇〇人のアメリカ及び一〇、〇〇〇人のフィリピンの兵士は虐待と意図的な殺人で命を落とした。捕獲された地点から捕虜たちは最高で六日間、ほとんど休憩もなしに行進させられた。食糧や水の給与を拒絶され、彼らは疲労で倒れ、その場で銃撃されたり、銃剣で突かれたり、または首を刎ねられたりした〉

(後略、棒線は論者)

はたして、この説明は本当なのであろうか。

一 食糧や水の拒絶?

バターン半島での米比軍との戦闘を身近に体験した作家火野葦平(あしへい)は、マリベレスの水汲み場での米比軍の

『昭和史研究所会報』第67号(平成14年11月10日)

兵士の様子を次のように描写している(『バタアン半島総攻撃従軍記』大日本雄弁会講談社、昭和十七年、GHQ没収本)。

「マリベレスの町には、まだ、米兵や比兵の捕虜が、あちらこちらに屯(たむろ)してゐた。水道のところに、水筒をぶら下げた捕虜が一列になつて水を汲んでゐた。米兵と比兵と交つてゐたが、前の方に比兵がゐても、米兵はおとなしく順番を待つてゐた。何百人といふ捕虜を一人であづかつて、兵隊は閉口してゐた。あとからあとへ出て来る捕虜が、日本の兵隊に近づくと、もう、知らんわ、お前たち、勝手にせえ、とはがゆさうにいつた。投降兵は相手にされないので、どうしたことかといふやうに、かへつて困惑して、そのあたりをうろうろしてゐた。」

避難民に食糧を給与している我が勇士たち
(西川佳雄著『比島従軍記』グラビアより)

また、捕虜ではないが、避難民に日本軍が食糧を与えている写真もある。

二 歩かざるをえなかった

WSに「強制的に歩かせた行進」とあるが、七万人をトラックで運んだとしたら、どの位の台数が必要か試算してみよう。

百キロの距離を時速五十キロで運転すると片道二時間(往復四時間)、一日の稼働可能時間を明るい日中の八時間とすると、一日に二回しか往

復できない。一台当り三十人乗せると一日六十人輸送可能。六日間では三百六十人／台となる。

七万人を三百六十人／台で割ると、百九十五台のトラックが必要となる。少なめにみた台数であり、実際はもっと多くの台数を要する。運転手も用意しなければならない。

四月九日に米比軍は日本に降伏。画家の向井潤吉は捕虜の大群を絵に描くと同時に、捕虜を日本兵が指揮している様子を『比島従軍記　南十字星下』(陸軍美術協会、昭和十七年、GHQ没収本)に残している。その一節である。

「コレヒドールから何時になく激しい高射砲の音が響いた。十時半頃、マリベレスの方から自動車で、十五六人の米人将校が送られて来て私達の設営地近くで降された。『何千、何万居るか判らんのに、一々糞丁寧に送れるかい。サァ此処から先きは歩いた歩いた』と兵隊の運転手が云ひ捨てて、又マリベレスの方へ引き返して了つた。」

まだ、コレヒドールの攻略を控え、トラック輸送には限界があった。歩かせざるをえなかったのであり、「強制的に歩かせた」など全く現場を無視した机上の空論に過ぎない。

三　いつでも逃げられる

約百キロの行軍距離を、前出の最高日数六日で割ると一日約十七キロである。明るい時間帯に一日八時間歩いたと仮定すると、時速にして二キロ(一般成人の歩行速度は時速四キロ程度)である。ノロノロ歩いているに過ぎない。六日の半分の三日を要したとしても、時速四キロ、一日約三十二キロの行程であり、極端に無理な距離ではない。

バターン攻略戦に参戦した山田光治氏(京都第十六師団司令部部員、一等兵)は、当時の状況を次のように述べている(『初年兵の初陣覚書』私家版、平成十八年)。

「戦争終結と共に、野から山から湧き出て来た米比軍の元気で陽気な姿というものは、まるでオリンピックが終了した後のピクニック気分の行進のようなもので、およそ捕虜などという陰湿な姿ではなく、どうしてあれが『死の行進』になったのか、不思議でならない。捕虜の護送といっても、百名か百五十名に一人の日本兵が監視兵として一緒に歩いているだけであり、しかも道路の両側は、同じ民族のフィリピン人である。逃げようと思えばいくらでも逃げることができる」

いつでも逃げられる状態での行進だったことが分かる。WSは推定して「フィリピン人が一〇、〇〇〇人命を落とした」と記述するが、一万人を例えば六日で割ると、一日当り約千六百人と膨大である。手錠も足枷(あしかせ)もかけられていないフィリピン人は何故逃げなかったのであろうか。本稿で紹介する写真を見る限り、WSのいう「その場で銃撃されたり、銃剣で突かれたり、または首を刎ねられたりした」という光景は想像だにできない。むしろ、捕虜百人か百五十人に一人の日本兵の監視では、逆に捕虜たちに殺害される危険すらある。

敵軍、自動車に白旗を掲げて到着、会話をする両軍の兵士
(『比島従軍記　南十字星下』より)

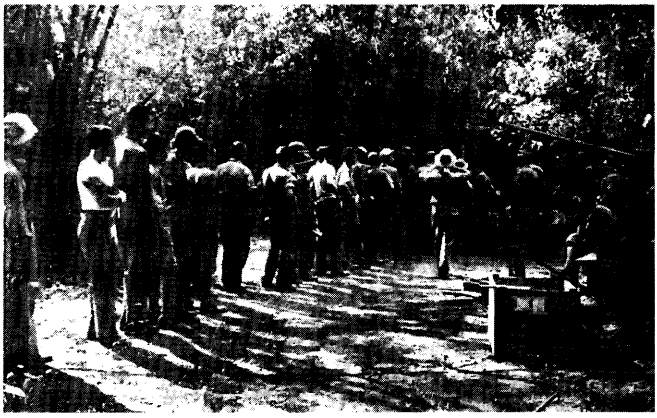
海水浴をする米兵捕虜(『比島戦記』より)

前掲の『比島従軍記南十字星下』や、火野葦平らが書いた『比島戦記』(昭和十八年)などに面白い写真がある。日米の兵士が降伏して来た米軍の自動車に群がり会話をしている様子、行軍中近くの海岸で捕虜たちがくつろいで海水浴をしている様子が写っている。行軍中にそれだけの余裕があったこと、また日本軍がそれを許していたということである。ゆっくりと、のんびりした「死の行進」なのに、いったい米兵はどれだけ弱々しいのであろうか。護送のため歩いた日本兵は、背嚢(はいのう)を背負って銃を担いで歩いているのである。

四 コーヒーサービス、医療行為

『比島従軍記　南十字星下』には、ア

降伏した敵将校に紅茶をふるまう日本軍(『比島従軍記　南十字星下』より)



野戦病院で診療を待つ捕虜の列(『比島従軍記　南十字星下』より)

また、「診療を待つ捕虜の列」という野戦病院で診療を待つ捕虜の列を撮影した写真もあり、捕虜の体を気遣っているのがよく分かる。

これらは米軍の一部の部隊に向けた対応かも知れないが、日本軍は米兵を丁重に扱っていたのである。

「敗戦も物かはポーカーに興ずる捕虜」(『コレヒドール最後の日』成徳書院、昭和十九年)の写真もある。捕虜に自由な時間が与えられていたことが分かる。

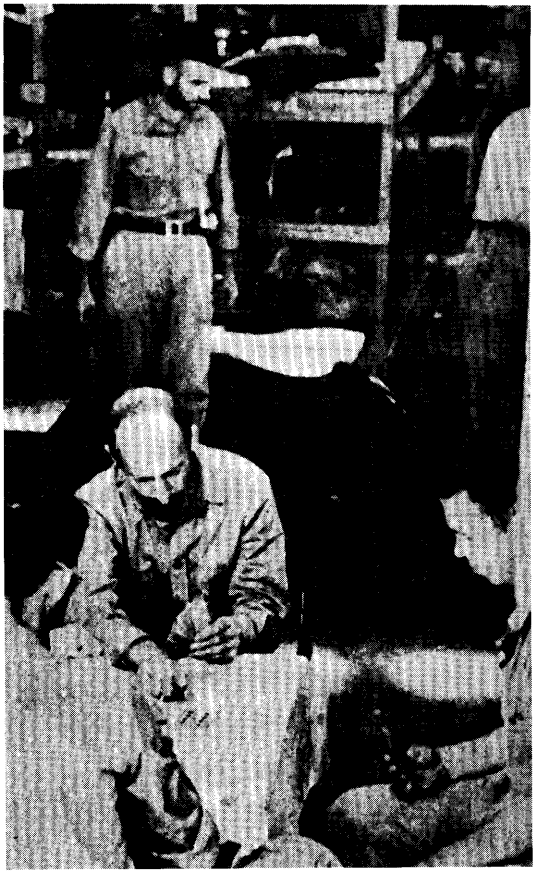
マッカーサーの裁判

メリカ軍将校に紅茶をふるまっている写真もある。米兵はまるでピクニック姿であり、軽そうなリュックを背負っている。

バターンと南京に触れた重要な本

がある。

それは、米軍のマーシャル元帥が終戦直後に書いた第二次世界大戦の『戦闘報告書』(作成日、昭和二十年九月一日)の和訳本(『勝利の記録』(マンニチ出版部、昭和二十一年八月十五日発行)である。その中に、「第二次世界大戦へと進展せしめた国民にとつて余りにも唐突な異変の週間であつた。日本は奉天、上海、真珠湾、バタアンにおける悪逆に対し充分なる償ひをさせられてゐるのであつた」と「バターン」は明確に書かれており、なぜか「南京」はない。英語の原文にも南京の記述はない。



ポーカーを楽しむ捕虜(『コレヒドール最後の日』より)

前記『戦闘報告書』の和訳本が別の訳者で三カ月遅れて出版され(『欧・亜作戦の戦闘報告』東京勤労社、昭和二十一年十一月三十日発行)、そこには次のようにある。

「第二次世界大戦に導いた連続的闘争に第一弾を投じた国民にとって一瞬の突発的惨事の週間であった。日本は南京、奉天、上海、真珠湾及びバタアンにおける反逆に充分なる代償を払はせられつゝあつた」。突然、南京が追加され、時系列的には上海の後に南京と書くべきところを、ついトップに付け加えてしまった。そもそも南京虐殺はなかったからこのような齟齬(そご)が生じるのである。

それはさておき、マッカーサーは真珠湾よりも、自分が指揮し敗北を喫したバターンが問題だった。本間中将を裁いたマニラ裁判の場に、バターンとは全く関係ないシンガポール陥落時の英軍のパーシバル司令官

AP通信が65年ぶりに修正した、死傷者を運ぶ行進中の写真。場所はバターンではなく捕虜収容所であった。

などを呼ぶなど、マッカーサーは「バターン」を強く意識していたことがうかがえる。その影響もあり、マッカーサーの日本占領後すぐ、東京裁判に先行して、「バターン死の行進」などを理由に本間中将は裁かれた。爾来バターンに関係する証言や写真が喧伝され、今日にいたっている

長年にわたって、「バターン死の行進」の証拠として使われてきた写真が、平成二十二年に次のように訂正された(読売新聞、三月二一日)。

「死の行進」写真ではなかった、六五年ぶり修正

【ニューヨーク＝吉形祐司】第二次世界大戦中の一九四二年四月、フィリピン・ルソン島のバターン半島を攻略した日本軍が、米軍やフィリピン軍の捕虜を炎天下で一〇〇キロ歩かせて多数の死者を出したとされる「バターン死の行進」の写真について、配信元のAP通信は、数週間後の遺体埋葬の写真だったとして六五年ぶりに写真を訂正した。

写真は米軍が日本軍から押収し、四五年に『バターン死の行進』で同僚の捕虜に運ばれる死傷者」との写真説明で配信された。歴史的な一枚として繰り返し使用されてきたが、ニューメキシコ州に住む生存者の元米兵が昨年八月、地元紙に掲載された写真を見て間違いを指摘、AP通信が国立公文書館の資料などと照合した結果、捕虜収容所で撮影された写真だとわかった。AP通信は、写真説明を『バターン死の行進』後に捕虜収容所で

行われた埋葬の模様」と訂正した。通信社が、歴史的な写真について訂正を出すのは異例だという。

マスコミを動員した米国の「謀略」の一つが明らかにされたことは貴重である。

マッカーサーの責任

火野葦平は、戦後GHQ（連合国軍総司令部）から「バターン死の行進」のことを尋問され、次のように記録している（『革命前後』中央公論社、昭和三十五年）。

「ゼネラル・ホンマが罪を問われた『バタアン死の行進』のときには、君もいたわけですね。どんな感想がありますか」

「ずっとはじめから終りまでいまして、事情をよく知って居ります。この［昭和二十一年］二月、マニラで行われました本間中将の裁判で、本間さんが死刑に処されたことを、私は残念に考えて居ります。この当時のバタアンの事情についてここで申しのべますことは、あまり煩雑に、また長くなりますから省きますけれども、結論として、私は『バタアン死の行進』については本間雅晴将軍になんの罪もなく、本間さんが鬼畜と称せられていることは当らないと考えます。

本間さんは立派な人で、部下はもちろんのこと、フィリピン人たちからも尊敬され慕われて居りました。本間さんが軍司令官の任を解かれて帰国するときには、比島人たちは、ぜひフィリピン総督になって、もう一度来て欲しい、と多くの者が心からそれを望んでいたくらいです」。

三万人の日本軍の倍以上、約七万人の米比軍を放りだしてさっさと「I shall return」の台詞を残してオーストラリアに逃げたマッカーサーの責任が一番大きい。日本だったらあり得ない話で、軍法会議ものである。水筒だけの捕虜と同じ行進を、重装備の日本軍兵士も行っているのであり、捕虜虐待という発想がどうして出てくるのか不思議だ。

いずれにせよ、「バターン死の行進」を「あったあった」という人は、死の行進のもつ政治的背景も念頭に、実際に従軍した人たちの書いた本も読み、それから発言してほしいと思っている。

みぞぐち いくお
一九四五年、鹿児島県生まれ。北海道大学工学部卒業後、八幡製鐵入社。新日本製鐵退職後、南京事件、ビルマ独立義勇軍などを研究。GHQの没収した図書を収集調査・データベース化し、『GHQ焚書図書開封』（徳間書店）の編集協力・一部執筆を行った。著書に『南京事件「証拠写真」を検証する』（共著・草思社）、『絵具と戦争』（国書刊行会）がある。